

# 乳房炎に立ち向かう

## 知らないと怖いマイコプラズマ性乳房炎

釧路東部事業センター 姉別家畜診療所 獣医師 澤口 真樹

みなさんはマイコプラズマという菌を知っていますか？近年マイコプラズマによる乳房炎の報告が急増し、大きな問題となっています。今回はこのマイコプラズマ性乳房炎についてお話します。

### 発見が遅れたら大損害!!

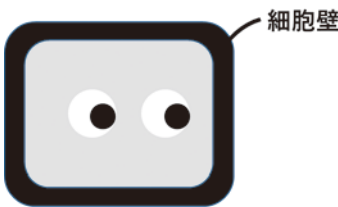
マイコプラズマは細菌の仲間で、感染力が強く、種類によっては症状がとても重いことが特徴です。感染初期は無症状ですが、進行すると泌乳量が急激に低下し、泌乳が停止してしまうこともあります。感染牛に使用したミルカーをそのまま他の牛に使用すると、その牛が感染してしまいます。発症してしまうと治癒は難しく、強い感染力により一気に感染が拡大すれば経営に大打撃を与え

かねません。子牛の肺炎の原因菌としても知られており、肺炎も治癒率が悪く非常に厄介です。マイコプラズマの検出には特殊な検査が必要であり、通常行われる培養検査では検出できないため、共済組合で行う細菌検査では「菌検出せず」という検査結果になってしまいます。また、限られた抗生剤しか効果がないため、乳房炎治療によく使用するペニシリン系・セフェム系の乳房炎軟膏を注入していても改善されません。そのため、気づいた時は牛群全体に広がってしまうこともあり、マイコプラズマはとても怖られています。

乳房炎軟膏で治癒しない乳房炎が多発する、細菌検査で菌が検出されないにもかかわらず症状が重くて治

癒しないなど、いつもの乳房炎と違うと感じたら、獣医師に相談してみてください。

### 一般的な細菌



- 細菌壁がある

### マイコプラズマ



- 小さい
- 細胞壁がなく、形を変えられる

➡ 体内に進入しやすい

### 感染源は意外なところから

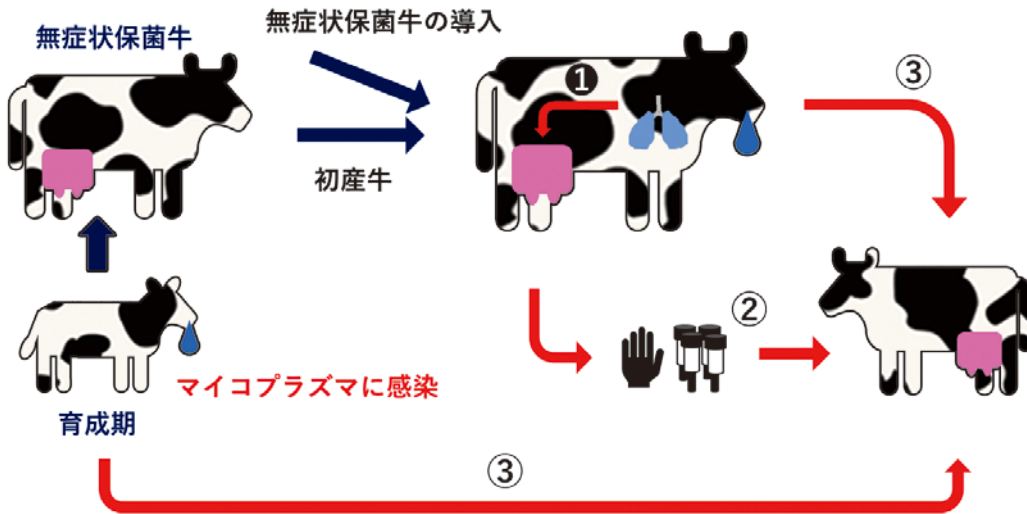
牛群に感染が広がるのは搾乳を介してですが、最初の1頭目はどこから感染するのでしょうか？哺育・育成期にマイコプラズマ肺炎に感染した牛は、分娩を契機にマイコプラズマ性乳房炎を発症することがあります。最初の感染は、このようなマイコプラズマを保菌した初産牛や外部からの感染牛の導入が主な原因とされています。また、保菌牛の鼻汁には多量のマイコプラズマが含まれており、環境や作業者を介して感染が成立することもあります。

近年、子牛の集団哺育の増加に伴い牛の呼吸器病が多発し、マイコプラズマを保菌した育成牛が増えています。このような育成牛が初妊牛・導入牛として牧場に入ってくることで、飼養頭数の多いフリーストールを中心にマイコプラズマ性乳房炎は増加しています。

### 対策のカギは早期発見

現状ではいつ、どの農場でマイコプラズマ性乳房炎が発生してもおか

# 乳房炎部会から



- ①肺などに感染したマイコプラズマが血液によって乳房へ移動
- ②搾乳者の手・ミルクカーを介して乳房内へ侵入
- ③鼻汁に含まれたマイコプラズマが、環境・作業者を介して乳房内へ進入

いずれの場合も、陽性牛が出てしまったときは、共済組合を含めた関係機関に相談して早期に対策を講じましょう。マイコプラズマの対策も「もたず」「つくらず」「もちこませず」の三原則が大事ですね。

しくありません。発生してしまった場合、いかに早く鎮静化できるかは、発症牛をどれだけ早く発見できるかにかかっています。

早期発見のためバルク乳のスク

リーニング検査で、搾乳牛群に保菌牛がいなか定期的に検査しましょう。また、牛群に新たに持ち込まないように導入牛と初妊牛の事前検査を実施することをお勧めします。1回の検査では、感染牛の約3割は検出されないと言われていまます。複数回連続して検査結果が陰性であった場合にのみ搾乳牛群に入るようにすれば、より確実になります。さらに育成期の肺炎対策も行い、保菌した牛をつくらないことも重要です。